

る点である。極めて例外的ではあるが、この時期にこうしたテーマでの講演も部分的に行われていたことを確認することができる。

続いて、討論会について見よう。任意に選んだ1920年8月と21年6月に各青年会が開催した討論会の主題を見ると、表3のようになる。

表3 各青年会の討論会の主題

主催青年会	討論の主題	『東亜日報』 の記事掲載日
慶北安東青年会	「人格が金銭に勝つ」	1920.8.3.
黄海安岳半島青年会	「柔能勝強」	1920.8.9.
全南和順綾州青年会	「社会発展には金銭が知識に勝つ」	1920.8.14.
咸北城津女子青年会	「家庭教育が学校教育に勝つ」	1921.6.8.
忠北清州青年会	「社会発展には精神か物質か」	1921.6.10.
忠南青陽青年会	「事業成功には誠勤が知識に勝つ」	1921.6.10.

討論会では、金銭か人格か、金銭か知識か、家庭教育か学校教育かといったように、いずれが重要かをめぐって討論を展開していたことがわかる。そして討論の結論はもちろん教育・人格・知識が重要だという方向に誘導されていったのである。講演会と討論会の主題を見ると、当時の青年運動が「文化運動」一般で目標に掲げられていた「文化向上」「実力養成」を志向していたことがわかる。

講演会や討論会以外に各青年会がしばしば開催したものとして、運動会のような体育行事がある。運動会では、競走や「爆弾ゲーム」などを行い、そのほかにも他の青年会とサッカー・野球・テニスの試合などをよく開いた⁷²。また、多くはなかったがシルム（朝鮮式相撲）大会を開催することもあった⁷³。青年会の中には素人劇を公演するものもあった。たとえば、1921年6月、寶城青年会は、「自然の愛と神秘の情」「人生の万華鏡」という題の素人劇を公演しており⁷⁴、同月、元山青年会でも「我の母」「早婚の弊」という題目の素人劇を公演している⁷⁵。青年会の素人劇公演は、多くは風俗の改良を促すことを目的とするケースが多かったと見られる。これ以外にも、青年会は夜学・音楽会・演説大会・伝染病防疫活動・モルヒネ撲滅運動・洪水後の道路や橋梁修理事業など、さまざまな活動を展開した。

3 支配当局の青年運動対策

上述したように、朝鮮においては1919年秋から「文化政治」の空間を利用した青年団体が急速に誕生・発展し始めたが、朝鮮総督府はこれに対する明確な対応方針を当初定め

72 『東亜日報』1920年6月28日、「載寧大運動会 举行」、1921年8月21日、「兩 青年会의 蹴球戰」、1921年8月31日「半島青年運動団」。

73 『東亜日報』1920年6月21日、「元山市民脚戲大会」。

74 『東亜日報』1921年6月2日、「宝城青年会 素人劇」。

75 『東亜日報』1921年6月17日、「元山青年会 素人劇」。

ることができていなかった。たとえば、1920年2月、慶南陝川の草溪面では草溪青年会が発起したが、これに対して陝川警察署は明らかに警戒ないし干渉する気配を見せた。ところが5月頃になると、慶南道庁および陝川郡のさまざまな行政官庁が草溪青年会の趣旨に賛意を表し、支援を競って申し出たという⁷⁶。ところで1920年9月、全羅南道の道知事を務めていた元應常が道知事会議で行った発言によると、総督府は内務局長の通牒を通して、青年団体の設立の誘発を避けるように、もし自発的に組織される場合はそれに接近して適切な指導を行うように、と指示したという⁷⁷。慶尚南道が態度を変えて草溪青年会に積極的に接近したのが1920年5月であることを考えると、総督府の内務局長の訓令が出されたのはおそらく1920年5月頃のことであると思われる。

ただし、総督府はこの時点でも青年団体を警戒していたように見受けられる。たとえば、1920年9月、政務総監の水野鍊太郎は道知事会議で、「近時地方各地に続出する青年会の如き其の外面は人格の向上体育の奨励等美名を列举すと雖其の組織行動等穩健を欠くもの尠からず」と述べた⁷⁸。水野がこのように述べたのは、青年会が主催した講演会が「無秩序なる自由思想を唱道し放縱なる平等主義を謳歌し文化運動の仮面の下に奇矯激越の言論を弄して暗に独立運動を煽動し好て民心を動揺せしめむとするものなきにあらず」と考えたからだ⁷⁹。

このような憂慮は、部分的には当たっていた。一部の青年会が主催した講演会で講演者たちが大衆の覚醒を促しながら、密かに民族意識を刺激する発言を行う場合もあった。また、平北廻川郡新豊面の青年会は、表では青年の知識啓発や精神修養を掲げながらも、裏では朝鮮独立をその目的として、上海臨時政府と連絡をとろうとして摘発されたこともあった⁸⁰。しかし、総督府側のこのような見方には多少誇張が混じっている。一部の青年会でこのような事例があったとしても、それはむしろ例外的なケースであった。ほとんどの青年会は智徳体の修養を掲げて、講演会・討論会・夜学・運動会などの穩健な事業を繰り広げていた。『東亞日報』は1912年3月の社説で「元來、青年会はその本質上において修養団体、親睦団体、娯楽団体であり、地方開發をその目的とする団体である。それ故、その存在が文化發展と地方開發に必要であれば、官庁当局はこれに対して活発な援助を行わなければならない、もしそうでないとするなら、斷固な手段をとるべきである。吾人が聞くところによれば、青年会に対する総督府の幹部の意見もまたその通りである」と書いている⁸¹。1920年12月、全国的な青年会連合団体として構成された朝鮮青年連合会の初代執行委員長の呉祥根は1921年初めに、青年会の活動が思ったより不振なのは当局が青年会を一種の独立団体と見なして妨害を加えてきたゆえんで、地方青年会の發展のためには当局

76 『東亞日報』1920年5月9日、「草溪青年会」。

77 「道知事提出意見」（1920年9月）（韓国国立中央図書館所蔵）。

78 朝鮮総督府『施政に関する論告・訓示並演述』（1919～22年）43頁。

79 同上、30頁。

80 『東亞日報』1921年5月26日、「독립을 목적인 青年会원」。

81 『東亞日報』1921年3月12日、社説「各地 青年会에 대하여（下）」。

の了解が必要であると主張した。⁸²

また、各地方の青年会の幹部には地域の富豪と有志が多かった。たとえば、木浦青年会の会長の金商燮は木浦屈指の資産家で、他の会員もほとんどが地域の資産家であった。また安東青年会の副会長の権台淵は安東面長を歴任した人物で、1920年9月には慶北道会議員にもなった。⁸³なお、青年会の創立式に道知事が参席し、祝辞を述べることもあった。これらを考えると、青年会の一部は事実上、官辺青年会だったとも思われる。

そんな中、1921年10月、総督府は各道知事に通牒を回付し、各地の青年会に対する調査や「成績の優良な青年会」に対しては「賞揚の策」を講じるように指示した。⁸⁴これにしたがって、各地方では青年団体の体制内化に本腰を入れ始めた。たとえば、全羅南道では1921年11月に各青年団体の幹部46名を招待し、青年修養講演会を開いて、青年会の活動をより穏健な方向へと誘導した。5日間のこの修養会では講演・地方改良の活動写真の観覧・慈恵病院の視察・歓談会などのプログラムが実施された。また、全羅南道は1922年5月に各青年会の指導的な人物を選抜し、平和博覧会が開かれる日本に「内地視察団」という名目で送ったこともあった。⁸⁵

その一方、一部の地方では地方官が官辺青年団体の組織化に着手してもいた。たとえば、江原道の楊口郡守の李承瑾は1920年春に、普通学校卒業生を中心に「地方改良」を目的とする青年会を組織し、講習会の開催・かます編みの機械の製作・共同耕作などの事業を展開した。⁸⁶黄海道兎山でも1921年2月、普通学校の校長・警察の駐在所長・面長が協議して「社会教化」を目的とする青年会を組織し、面長をその会長に、普通学校の教員を副会長に任命した。⁸⁷

1922年6月、全羅南道は青年会の指導方針を、既存の青年会を堅実な方向へ誘導することと健全な青年会の設立を支援することとしているが、これは当時の地方官庁の青年会に対する対応策をよく表している。⁸⁸各地方官庁の青年団体に対する干渉ないし官辺化や、官辺青年団体の設置支援は、1922年後半からより積極的に現れた。平安南道では1923年1月に青年団体に関する調査を実施し、「青年団体の指導方針」を通達した。その内容を見ると、青年会に対する地方官庁および学校の指導や支援を強化すること、青年会の指導者幹部の養成に努めることなどが含まれている。⁸⁹全羅南道は青年会の目的について、「青年会ハ会員ノ修養機関ニシテ健全ナル国民タルヘキ素養得シムルヲ以テ其ノ目的トス」「地方ノ開発並ニ朝鮮統治上由々敷悪影響ヲ及ホスモノアルヲ認ムルヲ以テ〔中略〕併合ノ精神ヲ闡明シ文化政治ノ本義ヲ説示シ其ノ適従スル所ヲ知ラシムルヲ要ス」と整理している

82 呉祥根「地方青年団体 発展策」（『東亜日報』1921年2月25日）。

83 森川清人編『朝鮮総督府施政25周年記念表彰者名鑑』（表彰者名鑑刊行会、1935年）1135頁。

84 『毎日申報』1921年10月28日、社説「青年会の奨励——当局の積極的指導方針」。

85 全羅南道内務部、前掲『青年会指導方針』13～14頁。

86 朝鮮総督府『第一回 地方改良講習会講演録』（1920年）589頁。

87 朝鮮総督府学務局『学校を中心とした社会教育状況』（1922年）164～171頁。

88 全羅南道内務部、前掲『青年会指導方針』15～17頁。

89 『東亜日報』1923年1月15日、「青年団体 調査」。

⁹⁰が、これは当時の支配当局が青年会をどのような方向へ誘導しようとしたのかを示している。

このような青年団体に対する干渉や官辺化、官辺青年団体の組織支援などは、当時の青年会運動を主導していた勢力に危機感を抱かせた。つまり青年会運動の主導権を官辺青年団体に奪われてしまわないかという憂いであった。当時の各地方官庁では青年会をはじめ、矯風会・振興会・夜学会・各種産業団体などを組織し、いわゆる「地方改良」事業を繰り広げていた。これは当時の朝鮮人ブルジョア民族主義者の「文化運動」とその内容において類似していたので「官辺文化運動」と呼ばれた。かくして朝鮮人民族主義者と日帝支配当局は、「文化運動」の主導権をめぐって競争する様相を見せたのである。

結び

朝鮮の青年運動は1920年代初めに本格的に始まった。1910年代にも一部青年会が組織されていたが、その数は極めて少なかった。三・一運動直後の1920年と1921年に青年会が雨後の筍のように組織されたが、これは1920年に創刊された『東亜日報』などの言論媒体が青年会の活動を積極的に報道したことに刺激されたためであった。ところで、このような青年会は、日本ですでに1890年代以降に登場し、1910年代には広く普及していた青年会から一定の影響を受けていたと考えられる。また、韓末以降1910年代にかけ朝鮮で展開されていたYMCA・エプワース青年会・青年学友会・朝鮮人青年会などからも一定程度影響があったと考えられる。

1920年代初め、朝鮮で組織された青年会は、主として郡・面単位を中心に結成され、村落単位で組織されるケースは極めて珍しかった。これは村単位を中心に組織され、その後、市町村単位の組織へと拡大していった日本の青年会とは異なる姿だろう。朝鮮で青年会が郡・面単位を中心に組織されたのは、青年会の主体となり得る新学問を修得した青年層が少なく、その程度の厚みしかもたなかったためだと考えられる。

ところで、この時期に組織された青年会のほとんどが親睦・知識啓発・道徳の涵養・体育奨励・風俗の改良・勤儉貯蓄などをその趣旨として掲げていた。つまり、人格修養・文化向上・風俗改良などを目標としていたのである。これは当時の文化運動者が主唱していたことと軌を一にする。各地方の青年会はこのような趣旨と目的を達成するために、講演会・討論会・運動会・夜学・音楽会・演説大会・素人劇などを開催し、一部では伝染病防疫事業や道路改修事業なども展開した。

支配当局はこのような青年会の急激な勃興に対して、当初は適切な対応方針を立てられず右往左往ぶりをさらけ出した。1920年5月、朝鮮総督府は内務局長名で各道に通牒を発し、青年団体の設置を誘発するのを避けること、万一自発的に組織される場合はこれに

90 全羅南道内務部、前掲『青年会指導方針』14、17頁。この資料の後半には、1910年からの日本の青年会の現状、日本政府の青年会の訓令や通牒が載っている。全羅南道は日本政府の青年会に対する指導方針をかなり参考にしていたのである。